第三回日本再発見塾 in 飯舘　報告書

「までい」～ていねいに生きてみる、2日間～

平成19年11月3日（祝）、4日（日）開催

「食べ物は“までい,,に”な」「子供は“までい,,に育てろよ」。飯舘村の人は今でもそんな風に話す。「手間ひま惜しまず」「時間をかけて」「じっくりと」。ロハスやスローライフの百年前から、日本人はていねいに生きる達人だった。古くて新しいそんな村で、懐かしい料理とどぶろく片手に、日本を見つめなおして見ませんか。

主催：「日本再発見塾」実行委員会

協賛：アサヒビール株式会社/株式会社空/株式会社大伸社
株式会社パイク/東日本旅客鉄道株式会社

後援：福島県/飯舘村/アミタ株式会社/構想日本/東京財団

協力：アディダス ジャパン株式会社/goo（NTT レゾナント）

目 次

・ スケジュール P. 1-2

・ 当日の様子 P. 3-28

開講式・昼食・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 3-4

第一部「何もなかった日本＝いまより豊かな日本？!」・・・・ P. 5-7

第二部「何もなかった日本＝いまより豊かな日本？!」・・・・ P. 8-10

第三部「100 年前の料理は、平成のご馳走」・夕食会・・ P. 11-18

民泊・聞香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 19

早朝ジョギング・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 20

第四部「『歌垣』復興」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 21-24

第五部「『までい』放談会」・閉講式・・・・・・・・・・・・ P. 25-28

・ 開催地について P. 29

・ 参加者・参加者の声 P. 30-32

・ 参加講師・達人、協力者、その他 P. 33-35

スケジュール

1日目：平成 19 年 11 月 3 日 (土)

9:30	受付開始 (ＪＲ福島駅西口改札付近)
12:00	開講式
12:40	昼食準備　全員で配膳しました
12:50	昼食　地産地消にこだわったおいしい給食を味わいました。
13:30 ｜ 15:00	第一部 何もなかった日本＝いまより豊かな日本？! 聞き手：塩野米松師範　達人：多田宏、永澤清、佐藤文良、高野チヨ子 地元のお年寄りから、過去６０～７０年の生活の移り変わりを伺い、 何もなかった頃の知恵や工夫にあふれた生活をまなびました。
15:30 ｜ 16:30	第二部 何もなかった日本＝いまより豊かな日本？!
	①里の文化、言葉 (訪問先：大雷神社) 師範：高橋世織、黛まどか、蜂谷宗苾　達人：赤石沢 弋彦、永澤清、高野チヨ子 江戸時代から村の雨(雷)を恵む「田の神様(たのがみさま)」と呼ばれ親まれている 「大雷神社」で 歌、四季をとおして里の文化を学びました。
	②住まいの文化～山と共に生きる～ (訪問先：只野俊宅) 師範：佐川 旭、藤原誠太、　達人：只野俊、佐藤文良 昔ながらの[までい]なつくりの民家 (昭和 4 年に建築) を探訪しました。 長年、山とともに生きてこられた達人から、木材や狩猟を通しての山との関係、 生態系の変化などを学びました。
	③村の暮らし～までいな手仕事～ (訪問先：前田直売所) 師範：塩野米松、山村レイコ　達人：齋藤政行、花井正志 村人のふれあいの場として親しまれている直売所で、昔ながらの様々な手仕事を 体験しながら、暮らしの知恵やまでいな暮らしぶりを学びました。 また、人足の文化 (助け合い) も交えお話をうかがいました。
17:00	第三部 100 年前の料理は、平成のご馳走 師範：野﨑洋光、富澤貞身　達人：飯舘までい料理を作っていただく皆様 飯舘の「食の歳時記」を、福島県出身の料理人・野﨑洋光、富澤貞身両師範より 学びました。また、両師範の今風のスパイスが加えられたオリジナル郷土料理を 参加者と 一緒に作り上げ、味わいました。
18:30	夕食会
20:00	交流会 第二部で 見て、歩いて、食べて学び感じとった、里の文化、住まいの文化、 までいな手仕事について、皆で意見を交わし更に考えを深めました。
21:00	各民泊先へ

2日目：平成 19 年 11 月 4 日 (日)

早朝	**起床**　各家で農作業・牧畜作業のお手伝い？ **朝食**　各ホームスティ先で家庭の味を堪能しました。
6:30	**増田明美師範と早朝ジョギングを楽しみましょう！ (希望者)**
8:00	**蜂谷師範と聞香を楽しみましょう！ (希望者)**
9:30	二日目会場「きこり」集合
9:50	**～までいな琴の調べ～**　演奏者：榎戸二幸 (生田箏曲)
10:15 ｜ 11:45	**第四部　『歌垣』復興**　平成初？　歌・俳句で始める新コミュニケーション **師範：　黛まどか、上野誠** 『歌垣』について、上野師範のお話を伺い、古の日本へ思いを馳せました。 その後、愛の問歌・問句の作者が選者となって、寄せられた答歌・答句の中から 心が通う作品を抽出しました。 選ばれた作品の作者には、問歌・問句作者より素敵な贈り物もありました。
12:00	**昼食**　新たな飯舘料理を味わいました。
13:00 ｜ 14:30	**第五部『　までい』放談会** 講師・達人のそれぞれが、飯舘の 2 日間を振り返り、 「までい」をテーマに、私たちの暮らし、日本文化の何を守り、 何を捨てるのかを、賑やかに議論しました。
14:45	**閉講式**
15:30	**解散**

当日の様子

平成 19 年 11 月 3 日（土）、素晴らしい天気と紅葉の歓迎を受け、第三回日本再発見塾は福島県飯舘村で開催されました。

開講式

菅野典雄村長が「日本は世界一安全な国だったが、いまは世界一危ない国に近づいている。効率一辺倒で走ってきた後遺症。までいライフで人と人が心を通わせてほしい」と呼び掛け、黛まどか呼びかけ人代表が「四季の移ろいに人間が合わせて暮らすのがまでいな暮らしのはずです。までいとは何かを見つめ直す二日間にしたい」と開会のあいさつをしました。

黛まどか 呼びかけ人代表

佐藤宣征 地元実行委員長

菅野飯舘村村長

田中俊 学生実行委員長

講師･呼びかけ人

司会 佐藤弘子 いいたて･までいユニット応援団長

昼食 地産地消にこだわったおいしい給食を、参加者みんなで配膳し、いただきました。

野菜のたくさん入ったコロッケが、好評でした。

第一部 何もなかった日本＝いまより豊かな日本？!

飯舘村の達人から、その暮らし方を話していただき、みんなで昔の日本の暮らしに思いをはせようという試みの第一部は、作家の塩野米松師範の軽快な司会で始まりました。

佐藤文良さん（76）のお話

「大工の道に入ったのは、高等科２年（15歳）のとき。母には年金がなく、ともかく自立する必要があった。大工は典型的な徒弟制で、理屈ぬきで親方の仕事を見よう見真似で体得していく世界。

給料というものはなく、下着やタオルを支給してもらい、夜明け前に家を出て、朝食、昼食、夕食の 3 食を仕事場で済ませて、夜は自宅に寝に帰る生活。

雨の日は大工仕事はないものの、親方が兼業農家だったので野良を手伝った。

現金収入はないが生活そのものを実質的に支えてもらう修行生活で、それが三年続いた。」

塩野師範によると、確かに大工仕事というのは、若いうちに体で覚えるのが慣例だったようです。また大工さんが兼業で農業を手がけるというのはよくあったことでした。

塩野師範

「今は建築建材といえば、必要な寸法ぴったりに製材所で機械的に切り出し、翌日には建設現場へと運ばれるが、昔は切り出した木材を山から下ろすまでには、非常に時間がかかった。「もとやま」と呼ばれる職人が木を倒し、角材にして、少しずつ斜面にそって下ろし、川を利用して町へ運ぶ。その間に自然に木が乾いてその木の素性のようなものが現れてくる。だから現場の大工さんは、木のクセをよく見極めてそれぞれどこの部位に使うか、それこそ「適材適所」ということをやった。角材にしても、5 寸必要なら 6 寸角にするというようなあそびが見てあったから、いいところをうまく使うこともできた。」

高野チヨ子さん（80）のお話

高野さんは村の昔の厳しい生活の状況を語ってくれました。

「初めて靴を買ったのは今から 56 年ほど前だったと思う（昭和 30 年代初頭か）。村に 7 軒ほどあった雑貨屋にはたわしや籠と一緒に長靴があった。それまでは「甚平わらじ」と呼ばれる足先を包み込む形のわらじを履いていたので、靴を買うという発想がなかった。そういう意味では「現金」を使うようになったのは昭和 30 年代に入ってから。それまではもっぱら米でやりとりしていた記憶がある。初めてセーターを買ったのも昭和 30 年代だったと思う。それまでは、綿羊から毛を刈り取って糸にして妹に編んでもらっていた。

電気釜を使うようになったのは、昭和 40 年ごろから。それまでぬか釜（後述）などで消費していた大量のぬかは、牛の床にも使った。我が家の田んぼは5反、だいたい7俵くらい取れた。夫の仕送りが月3万円程度、それでは長男を高校へやることはできなかった。長男は、中学を出たら自分が働くから次男を高校へやってくれといって、進学をあきらめた。」

淡々と語る様子からは、当時の村はみんなそんなものだったというような雰囲気が漂っていました。

高野さんは、この40年ほど、しめなわ飾りの内職もしています。
会場では持参した作品を数点披露してくれました。

永澤清さん（88）のお話

「自分は炭焼きや米作、駄馬などいろいろな仕事を兼業でやってきた。電気が村に通ったのは昭和 13 年の 10 月。普通の家では手ランプといって、油に紐を浸し、笠の先から紐を出して着火する、アルコールランプのような光源が一般的だった。篤農家になると、一家に1個電球があって、それがいろりの横の居間に取り付けてあったものだった。

屋根は萱屋根が普通で、どの家も自分の萱場を持っており、そこから萱を刈って溜めてあった。飯舘の場合は 10 尺（3メートル）の縄でひとくくりできる分量が 1 軒あたりの分担だった。萱屋根が、トタン屋根にとって変わってきたのは、30 年ほど前ではないかと記憶している。

今では『結（ゆい）』単位での活動はほとんどない。結婚式は専用の会館でやるし、葬式も葬儀屋でしている。昔は、結婚式などハレのときには、引き出物（「おつつみ」と言っていた）の落雁や練り物は、『結』の各戸が専用の木型があって夜通し作ったものだった。

飯舘は江戸時代から農耕に使う駄馬の産地として有名だったので、馬市が立ったものだった。相馬

藩の陣屋の記録によれば、江戸時代の飯舘村は人口 2888 人、それに対して馬は 1400 頭、実に人間の半数に及ぶ馬がいたことになる。」

塩野師範の解説

「『結(ゆい)』というのは、昔はどの田舎にもあった萱屋根を葺き変えるときのグループのようなもの。地域ごとに近隣の 8～9 軒からなる『結』があり、それぞれが萱を持ち寄って順番にメンバーの家の屋根の葺き替えを手伝いあった。『結』はしたがって、屋根葺きだけでなくお互いの生活面でも支援しあう共同体として機能していた。馬、特に駄馬は現在のトラクターに匹敵する貴重な農耕の道具だった。この村にトラクターが入り始めたのは昭和 39 年ごろ。」

塩野師範のまとめ

3人の話にあるように、昔の日本では、この仕事一筋、というよりも、四季折々にできることを何でもやって暮らしにつなげていくというのが一般的だった。だから農業もやれば、炭焼きもやる、大工もやるし、機織りもする。したがって現金収入があまり必要がなかった。

高度成長にともなって、だんだん現金の経済に取り込まれるようになると、村にいたのでは現金収入を得ることが困難なため、人々は山を下りて都会に出稼ぎにでるようになる。そしてそこで知った都会の生活を村に持ち帰る。そんな風にして、それまでの「までい」な暮らしのペースが急速に各地から消えてしまった。今では「結」もないから、萱屋根の葺き替えに1000万円もかかるが、1回の吹き替えで20年しか持たない。それでは萱屋根も持続できないわけだ。一人ひとりの技能の使い捨てでこんなことになってしまった。現代のスピード感や便利さとひきかえに失くしてしまったものへ思いを馳せる2日間にしたい。

第二部 何もなかった日本＝いまより豊かな日本？!

第二部では、飯舘村の各所へとグループに分かれて行き、第一部での地元の達人の話を踏まえ、飯舘の「までい」な生活を体験しました。

①里の文化、言葉 (訪問先：大雷神社)

師範：高橋世織、黛まどか、蜂谷宗苾　達人：赤石沢 弋彦、永澤清、高野チヨ子

「田の神様」大雷神社を訪問しました。最初に奉納されている神輿を見学、そのあと地元の赤坂神楽団による獅子神楽が特別に披露されました。

毎月 5 月に行われる村一番の大祭で数百メートルの行列をなして村内をぐるりと廻って、最後に大雷神社に奉納するとのこと。参加者の大人や子供の顔や頭に迫りながら人々の安寧を願う踊りは、人々の和やかな笑顔を誘っていました。

そのあとは神社の建物に移動してのトークセッション。村の事実上の中心地であるこの田の神様で 50 年以上も総代長をしている赤石沢弋彦さん、村の達人の永澤清さんや高橋チヨ子さんが、黛師範や蜂谷師範、高橋師範と村の文化について語り合いました。

高橋師範「田の神様というのはコメ、稲作の象徴で、それに対峙するのが山の神様。農民は山の人々に対して対抗心があったが、それを河童といういたずら好きの架空の動物に代弁させた。河童の頭の上の皿は水田の象徴なのだ。一方神楽で表現されるウマは山の神の象徴。だから河童がウマをおぼれさす、というような寓話が生まれてくる。」

②住まいの文化～山と共に生きる～（訪問先：只野俊宅）

師範：佐川 旭、藤原誠太　　達人：只野俊、佐藤文良

小高い山地を背に村の景色を望む古民家、只野さん宅にお邪魔しました。
奥の間に座して、只野さんと佐川師範のお話を聞きました。昔は材木を山から直接選んでいたということにはじまり、曲松や化粧材など家々の柱のつくりや、障子やふすまの細かな寸法など、具体的な只野さんのお話から、佐川師範がわかりやすく日本家屋古来の知恵について解説してくれました。

佐川師範「外来の「まど」は文字通り「窓」。けれど、日本は「間」の「戸」です。家の空間を住む人が工夫して仕切って「まど」をつくる。厳しい自然にさらされながら、いかにして四季を(特に夏)ゆたかに過ごすか。そうして日本では、家屋のつくりの表情やしくみが、折々にかえられるような家造りが生み出されていったのです。」

外に出て、宮大工の佐藤さんの出番です。私たちは一見して太い柱ばかりに目がいきますが、家を支える木材の組み方は1つではないのです。太く長い一本柱が軒下を貫いている様に皆感動しながら、そのほか木の職人の神業ともいえる技術に驚き、聞き入りました。
話の合間も、隅々まで木の様々な色と香り、興味深いつくりに参加者たちは、童心にかえったようにはしゃいではあちこちを見たり触ったりしていました。

③村の暮らし～までいな手仕事～（訪問先：前田直売所）

師範：塩野米松、山村レイコ　達人：齋藤政行、花井正志

前田直売所は、飯舘村にいくつかある農産物直売所のひとつです。今回お話を伺った前田行政区長・齋藤政行さんによると、もともと商売のためではなく、高齢化が進んだ村で、おじいさんやおばあさんたちが気軽に外出し自由に話ができる場を作りたいという思いから、村人のふれあいの場として作られたそうです。そこに次第に皆が集まるようになり、村で採れる野菜などを売る今のような形になりました。建物は約 130 人もの村の人たちが協力して作ったといいます。

齋藤さん「飯舘村には昔から「人足」（にんそく）と呼ばれる村人同士の助け合いの習慣があった。若い人、都会から移り住む人にも理解して協力してもらうことが大事」

そして、直売所の建物のすぐ隣にあるのが、これも村人の手作りの炭小屋です。父親の世代までは昔は貴重な収入源だった炭作りを、自分も習ってみたいという 50 代、60 代の有志が集まって作りました。

炭焼きのお話を伺ったあと、参加者は実際に巻き割りや俵を編む体験もしました。

第三部 100 年前の料理は、平成のご馳走

師範：野﨑洋光師範　富澤貞身師範　　達人：飯舘までい料理担当のお母さん達

第三部はずばり「食」です。今をときめく、分とく山の野﨑師範を中心に食に関する貴重なお話を伺ってから、実際に飯舘村の素材を使ったまでいなお料理を頂きました。

野﨑、富澤両師範とも福島県のご出身で、郷土料理に対する造詣の深い方々です。郷土料理にはその土地で生き延びるための工夫が一杯詰まっていることを食の歳時記に沿って具体的に説明して下さいました。

例えば・・・

・正月に食べるお節料理にはコブ（喜ぶ）、数の子（子孫繁栄）、橙（代々家系繁栄）等、すべてプラスの意味が込められていること
・4 日目に大根飯を食べるのは、大根に含まれるジアスターゼがご馳走続きの胃に優しく作用するという合理的な理由に基づくこと（7 日目の七草粥も同様の理由）
・凍み大根、凍み餅、凍み豆腐などは凶作への備えであったこと、凶作が 2 年続いても持ち堪えるように 1 年分以上用意したこと
・乾物は保存食であると同時に、美味しいだしが取れることを目的としていたこと
・お節だけでなく、食べ物の名前には必ずプラスの意味を込めたこと。（梨であれば「ありの実」など）
・料理名には季語が含まれていることがあるが、今はその意味合いがすっかり風化してしまっていること（立田揚げの立田は秋の季語であり、本来は秋の料理である）

これらはごく一部ですが、日本の食がここ 30～40 年間でいかに変わってしまったか、改めて驚かされました。高度成長時代、食品流通網の発達等、いろいろな要因はあるでしょうけれど、昭和 33 年にインスタントラーメンが登場したことは中でも大きいと野﨑さんは指摘されています。本来、ダシは素材の味を引き立てるものである筈なのに、ダシ自体が主張を始め、日本人の舌がそれにすっかり慣らされてしまったのですね。素材が美味しければ旨みが出るのですから、本来、調味料は不要なのです。

夕食会

忘れかけていた大切なことを思い出させられるようなお話に続き、食事が始まりました。お料理は飯舘村で郷土料理の復興に努めていらっしゃる地元のお母さん達が作って下さいました。
一般参加者の中からも 20 名が立候補し、猪鍋やどじょう汁作りにチャレンジしました。お料理は22種類、猪鼻飯、凍み餅等、珍しいものがたくさん並びました。
身を粉にして働いて下さった飯舘のお母さん達には本当に感謝です。お母さん達も野﨑師範や富澤師範と一緒に調理したことが嬉しかったとおっしゃっていました。まさにその場にいたみんなにとって身も心も満足な時間でした。

第三部　100 年前の料理は、平成のご馳走

「食の歳時記」

いいたてのごっつぉう

秋

Autumn

飯舘村歳時記

白露	9月8日	
	9月9日 重陽の節句（菊の節句）	菊酒、栗ご飯
秋分	9月23日 （秋彼岸）	ぼた餅（おはぎ）
寒露	10月8日	
	旧暦10月15日～17日 山津見神社祭礼（山の神講）	餅、ぼた餅、赤飯
霜降	10月23日	
	11月4日・14日・24日 太子講	太子講だんご、小豆がゆ
立冬	11月7日	そば
	11月20日 えびす講	小豆飯
小雪	11月22日	

秋の仕事

稲刈り
麦蒔き
芋がら干し
大根干し
たくあん漬け
白菜漬け　など

普段の食べ物

いなごの佃煮
きのこ飯、栗ごはん
干しいも
きのこの塩漬け
乾燥きのこ など

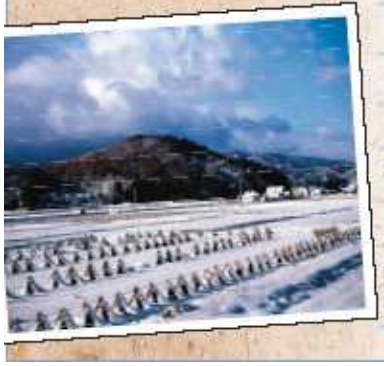
いいたてのごっつぉう

冬

Winter

飯舘村歳時記

大雪	12月7日	
冬至	12月22日	小豆南瓜（小豆と南瓜のいとこ煮） ゆず湯
	12月24日 納豆ねせ	
	12月28日・30日 餅つき、正月準備	豆餅、煮しめ、 こんにゃく、松飾り
	12月31日 大晦日	みそかそば、塩引き魚、 豆腐汁、煮しめ
	1月1日 正月	雑煮、きなこ餅、あかあか餅、 納豆餅
	1月3日	三日とろろ
小寒	1月5日	
	1月7日 七草節句	七草粥
	1月11日 農の始め	小豆粥（焼いた餅を入れる）
	1月14日 小正月	餅と豆腐の田楽焼き、 団子さし（ミズキに餅をさす）
	1月15日 松送り	餅
大寒	1月20日 えびす講	
	2月3日 春の節分	まめ柄の枝に鰯の頭、豆まき
立春	2月4日	
雨水	2月19日	



冬の仕事

炭焼き
柴刈り
むしろ・蓑 編み
凍み大根つくり
凍み餅つくり
凍み豆腐つくり　など

普段の食べ物

凍み餅、凍み豆腐
凍み大根の煮物
けんちん汁
すいとん汁
切干大根の油炒め
大根炒り　など

までい料理 献立

献立	食材
1 汁、鍋類	
・ままだんご汁	ジャガイモ、きぬさやに代わるもの
・だんご汁（すいとん）	小麦粉、ほか
・どじょう汁	どじょう、ほか
・いのしし鍋	猪肉、ほか
2 ご飯もの、餅類	
・猪ノ鼻ご飯	
・白おこわ	餅米
・ねりけぇ（そばがき）	そば粉、熱湯、長ネギ、大根おろし、醤油
3 おかず類	
・煮物	凍み豆腐、凍み太根、わらび、ふき（塩蔵）など
・花豆の煮物	
・ふきのうま煮	
・あぶらみそ	大豆：3kg、味噌、油
・にんじんときのこの白和え	
・イータテベイクのみそいびり	ジャガイモ、味噌、砂糖
4 漬け物	
・キュウリのどぶ漬け	キュウリ、塩
・キムチ	白菜、
・みそ漬け	
5 甘味	
・あずきかぼちゃ（冬至カボチャ）	小豆：5kg、かぼちゃ
・キュウリの甘露煮	キュウリ、砂糖
・凍み餅	凍み餅、油、砂糖、醤油
6 飲み物	
・野草茶	ドクダミ茶、メグスリノ木、桑の葉茶
・黒豆茶	黒豆
・しそジュース	赤しそ、砂糖

花豆の煮物、キュウリのどぶ漬け、ふきのうま煮 等

揚げた凍み餅にねぎ味噌をのせて

あずきかぼちゃ（冬至かぼちゃ）

にんじんときのこの白和え

凍み豆腐、凍み大根、きのこの煮物

猪ノ鼻ご飯（香り高いイノシシの鼻のように大きなきのこが入ったご飯）

手作りの竹のコップとお箸
コップは 羽賀清さん作
お箸は 飯舘村の高野靖博さん

参加者の三枝さんより
チョコレートをいただきました。
メランジュのおいしいチョコレート
です。

蜂蜜の試飲
藤原師範がさまざまな
蜂蜜を持ってきてくだ
さいました。

食事後、外内手踊り保存会 による手踊り披露で会場は華やかに盛り上がりました。

民泊

夜遅くまで、食べたり呑んだり歌ったりしながら盛り上がった家。
朝早くから、畑仕事や酪農の手伝いをした家。
それぞれの民泊先で、楽しい時間を過ごしました。

聞香

茅葺の古民家で、蜂谷師範の指導の下、お香を体験しました。

早朝ジョギング

朝早くから元気いっぱいの増田師範とともに、早朝ジョギングを楽しみました。
地元の方がたくさん参加しました。

第四部 『歌垣』復興

黛まどか師範の「愛の句碑のある愛の村･飯舘で、万葉時代の歌垣の復興をしてみよう」という呼びかけから、平成の御世に詠みがえった歌垣の世界に参加者は誘われました。

上野誠師範がユーモアを交えながら、歌垣について解説しました。

･歌垣とは、歌を掛け合う「歌掛け」。短歌も俳句ももともと掛け合うものだった。

･歌垣がうまくいくコツは、上手な歌を作ることではなく、時にはわざと下手な歌を作って相手が返しやすい歌を詠うことである。

このたび平成に甦った歌垣は、

①あらかじめ掲示された問歌･問句に対してまず参加者が答歌･答句を返す。

②その中から、黛師範と上野師範が3，4首･句を選ぶ。

③それぞれの答歌･答句の詠み人を明かさない状態で、問歌･問句の詠者が一首･句を選ぶ。

というやり方で進められました。

真剣に歌･句を選出する
黛･上野両師範

まずはじめは、菅野村長からの

わが村の自慢の種は住む人の

までい心とあいの句碑みち

の問い歌に対して、千葉県からの参加者、市原さんの

飯舘はゆったりまったり雲流れ愛の人垣母のぬくもり

が選ばれました。

いきなりのカップル誕生で会場は大いに盛り上がりましたが、市原さんの旦那様の複雑な表情が印象的でした。

他の秀歌は、

飯舘で分けてもらったまでいの種持ち帰ったらどう咲かせよう

飯舘の山の野菜も自慢の種子供のごとく真心こめて

次に水戸からの参加者、和田さんからの

うみねこの荒磯の岩を発てるとき飛べないふたり海を見てゐる

という問歌に対して、

なんと事務局長として寝食を忘れて運営にあたっていた小田の

白き波荒磯の岩に砕け散る二人で見たい波の行方を

が選ばれ、二組目のカップル誕生。問歌も答歌も、酸いも甘いも知った大人の歌です。

他の秀歌は、

ふたりなら荒波こえていけるはず笑みを絶やさず歩いてゆこう

猪々なべとどじょうなべとだんご汁喰いつくすれどとびたつふたり

飛べずとも瞳に映る君の微笑見ているだけで猫の恋

上野師範らしい諧謔の効いた選歌です。

続いて、その上野師範自からの

いいたての山の紅葉の色深く心は染まる君を思えば

という問歌に対して、
埼玉からの参加者、大塚さんの

ゆっくりと愛の心も染まりゆく色付く秋の飯舘村に

が選ばれました。上野師範の下心に反して、選ばれたのは男性！　会場は大いに盛り上がります。
他の秀歌は、

のびやかに漂う山の風よりも踏まれて紅葉に嫉妬する我
年経れば紅葉の色のとりどりに燃ゆる想いもあせなんとする

一見取っ付きにくそうに見える和歌、俳句の世界も、このようにコミュニケーションの手段として挑戦してみると、肩の力も抜け、言葉を探して操る楽しさに気付き始めます。
ここからは選者が黛師範に代わって、俳句の部です。
まず、上野師範への答歌を見事勝ち得た大塚さんからの

飯舘に溢れる愛や星月夜

という問句に対して、元ミス飯舘と評判の地元の荒さんの

逢ひたくてただそれだけや星月夜

が選ばれました。いやはや美しすぎるやりとりです。
他の秀句は、

星月夜君の笑窪にそっと触れ
星月夜きみの瞳に映りけり

続いて、今回は残念ながら参加できずビデオにて
メッセージを送っていただいた坂東三津五郎師範からの

かの人の足音近づく萩の風

という問い句に対して、岩手県よりいらした入月さんの

白萩の白き心に定まりぬ

が選ばれました。それぞれの句に対する黛師範と上野師範の解説の掛け合いが絶妙で、
会場は抱腹絶倒のるつぼです。高橋世織師範いわく「言葉のラリー」。
他の秀句は、

走り来し息を隠して萩月夜
萩の風きみを想いて酒をくむ
月満ちてまでひの里の逢瀬かな

最後はいよいよ真打、黛師範からの

降りみ降らずみ星の合ふ夜なりけり

という問句に対して、男性からの答句が殺到しました。
候補作を詠んだ壇上の 3 人の男性の中から、結局南相馬市の句会の西内さんの

逢ひたくて千里馳せ来し星今宵

が選ばれました。
他の秀句は

ただ君を思ひ続けて夜長の灯
降りやめばやうやう明かし星の恋

6 カップルの内、ベストカップル賞として、歌からは和田･小田組が、句からは大塚･荒組が選ばれ、飯舘村「あいの里」にそれぞれの歌を御影石に刻んだ歌碑･句碑が設置されることとなりました。
最初は「難しそう」「格調高くて入りづらい」と思われていた歌垣でしたが、飯舘村の万葉時代さながらのおおらかな雰囲気の中で歌や句を作り、黛師範と上野師範の名司会、名解説の下に各々の詩歌の言の葉を味わいながら、改めて日本語の豊かさ、深みを楽しみながら再発見させていただきました。
自らの言葉に磨きをかけて再挑戦したいと、参加者一同は思ったのではないでしょうか。

あいの沢にある
愛の句碑

「平成の歌垣」。日本再発見塾の新たな目玉になりそうです。

第五部『までい』放談会

二日間の日本再発見塾のまとめです。第二部で体験をし、交流会で語り深めた、各グループからの報告と、呼びかけ人・講師陣からコメントをいただきました。

司会進行は NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会の理事長を務めている、運営委員の澁澤寿一氏。澁澤氏は、ここ 40～50 年くらいで地球の環境が大きく変わったこと、機械化が進み、多くのエネルギーが消費されていることを語りました。

「人間は他の生き物の命を食べている。太陽の光は必ず地球に入ってくる。富士山に換算すると1年間に４００杯分のエネルギーが入ってきている。人間は太陽の光を食べることはできませんが、植物が食べて成長します。そして人が植物を食べます。ここ飯舘村は貧しい生活をしていると思われますが、一番植物を食べるには近い生活をしています。文化的に誇りを持って欲しい。」

呼びかけ人・講師よりコメント

藤原誠太師範：

飯舘村で養蜂をやっている方がいらっしゃるのですが、その方と落ち着いてお話をすることが出来ずに、残念でした。

蜂谷宗苾師範：

ハチの話つながりで蜂谷です。今回の「までい」のようなイベントをブームで終らせて欲しくないです。時代に合わせているところもありますが、根本がかわっていないことが大事です。

野﨑洋光師範：

私たちは手で食べません。他の国では手を使って食べます。これは文化です。

生活の中で、楽しみや喜びを感じて文化でできるんですね。

富澤貞身師範：

飯舘の食材のエネルギーを感じました。パワーがあります。それは料理を食べた人にも伝わったのではないでしょうか。

東京で仕事をしていますが、生産者の気持ちがわかって、これからそれを伝えたいです。

山村レイコ師範：

つくりあげることの大事さを実感しました。水や食べ物がどこからきて、どこへ行くのかがわからないと困ります。不安です。これは自分がどこからきて、どこへ行くのかと同じです。

分からなくなって、見えなくなって東京を離れたのですが、今少し見えてきて、食べ物が回り始めると全部が回り始まりました。それから「歌垣」に参加して久しぶりに心の底から笑いました。

黛まどか師範：

万葉集にも笑いの歌が多いんです。昔の人も笑いを大事にしていました。「紅葉」という言葉ひとつをとっても日本にはたくさんの色や風景の表現する文化があります。「照紅葉」でけでなく、「薄紅葉」とは、初秋のややに色がつき始めた紅葉です。言葉を知ることで見るものが増えます。これは日本人が盛を愛でるだけでなく、うつろう様のすべてに美しさを感じ表現することができるからです。日本人独特の美意識です。昔はお花見に行くときはお着物を新しくつくっていったものです。

つまり数ヶ月前から花見への助走がはじまっていた。その間は「までい」に生きていたわけです。

今のように桜も見ないで宴会をするのとは違います。

佐川旭師範

「カタチ」とよくいいいますよね。でもこの「カタチ」には「カタ」と「チ」があって、建築家として「カタ」ばかり作っていないか考えました。「チ」の部分、人間の心意気、巧みを「カタ」に入れ込みたいです。

高橋世織師範

言葉はすばらしいです。人と人を結びつけます。今、温暖化とよく言われますが、あんまり好きではないです。弱い言い方です。「高熱化」とかもっと実態を表したいい言葉があります。ここから食べ物と同じように、フードチェインのように言葉がつながっていくので、考えないといけません。

21世紀はこれまでの人類が体験したことのないことを全員が考えないといけません。

上野誠師範

「歌垣」が盛り上がってよかったです。カラオケで歌っても誰も他の人の歌を見たり聞いたりしていませんよね。さきほど加藤秀樹さんから「金かけずに笑えるんですね」って言われました。本当にそうですよね。これでお笑いの吉本とか呼んだら笑えるけどお金がかかって、笑えない話になります。歌垣はカラオケと違って双方向だから笑えるし、聞いてくれてるんです。

加藤秀樹運営委員

地元の言葉をひとつ新しく教えてもらいました。ここにポスターがたくさん貼ってあります。準備の段階で「までい」の言葉のバックにクルクルとしたマークをいれるかどうか事務局で話し合ったんですね。結局これでいこうとなりました。この二日間僕は成功したと思うんです。それで先ほどここの地

元の人から、このようにうまくいったことを「ガンマル」っていうことを聞いた。この「までい」の後ろのクルクルが「ガンマル」です。

閉講式

黛まどか呼びかけ人代表がまとめのあいさつをし、地元達人・実行委員会たちがそれぞれお礼のあいさつをしました。地元達人の高野チヨ子さんが「みなさんの前で話をしたことは一生の思い出です。これからも自信を持って生きていきたい」と感激で涙ぐみながら語り、会場の涙を誘うと共に、大きな拍手が送られました。

最後に、飯舘村の永澤清さん（88 才）がひとつひとつまでいに手作りしたミニわらじが参加者全員に終了証として配られました。

第三回日本再発見塾は、ていねいに一生懸命生きる、飯舘村の「までい」な生活を体験出来た、二日間でした。
飯舘村の人、さまざまな地域から参加した人、皆にとって自分たちの生活を見直すような発見のある二日間になったことでしょう。

開催地について

飯舘村は、福島県の県都福島市から東へ車で約1時間ほどの阿武隈山地の北部に所在する人口6500 人ほどの純農山村です。気候的には、標高４００m以上の高原に位置することから夏涼しく冬は寒さが厳しいところでもあります。

主な産業は農業ですが、特に、黒毛和牛の飼養が盛んで、《美味しい牛肉飯舘牛の里》としての名声も徐々に高まって来ています。

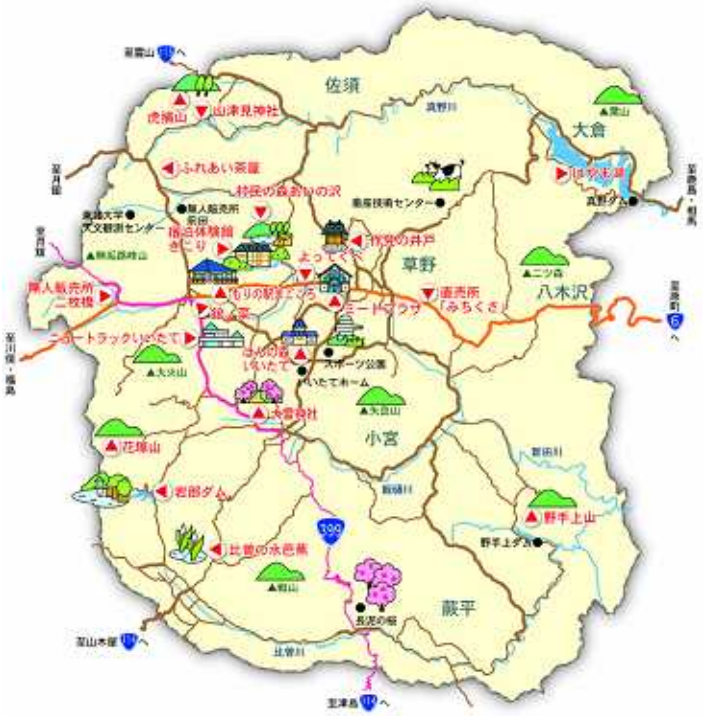
阿武隈山系の北端部に位置する村にはたくさんの自然と緑に囲まれています。また、そこには大自然と清らかな水、そして豊かな風土に恵まれ、悠々の時を経て造りあげた結晶であり、村の宝「いいたて　みかげ石」が豊富にあります。村のいたるところにみかげ石を使った道標（みちしるべ）やモニュメントがあります。

菅野典雄村長が黛まどかさんへ送った 1 通のラブレターから始まった、愛の句碑事業。全国から贈られた家族や恋人への愛の句の中より厳選されました 250 句が飯舘産のみかげ石に刻まれ、「愛の句碑」として村民の森あいの沢に永遠に置かれています。

近年は、気温の日較差を利用した花き類の栽培や高原野菜の栽培農家も増えて新しい産業として育ちつつあります。

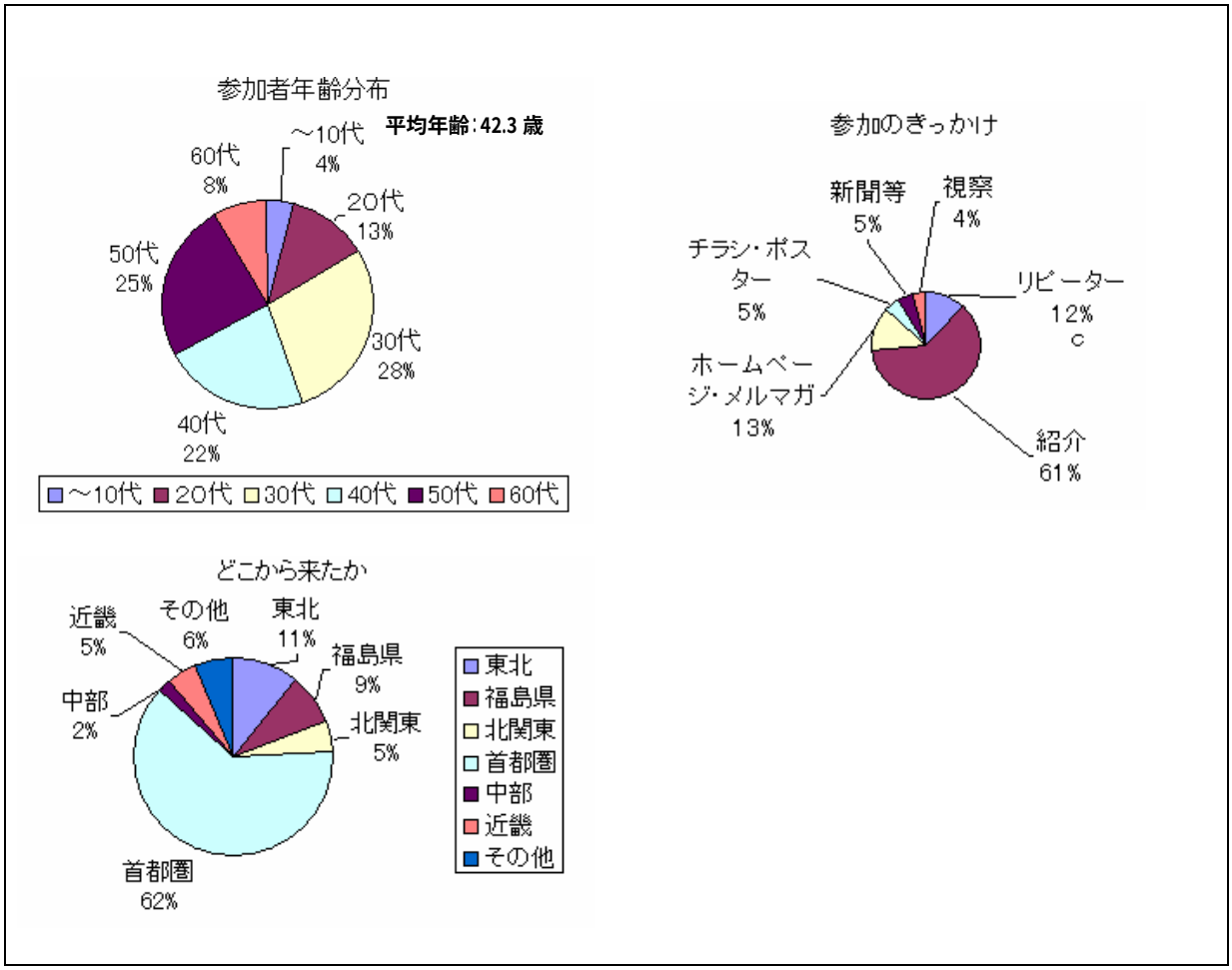
飯舘村は、少子･高齢化社会の中で、交流人口の増大･定住人口の確保を計りながら種々の施策に取り組んでいます。U･Iターン希望者等に対しても土地、建物取得時の借り入れ金に対する一定率以上の部分の利子補給制度も創設しています。

また、飯舘村は、平成の市町村大合併のときに、周辺町村と参画していた合併を離脱し、自立の道を選んでいます。独立自尊の新しい日本の市町村のあり方、日本人の生き方を追求している村でもあります。

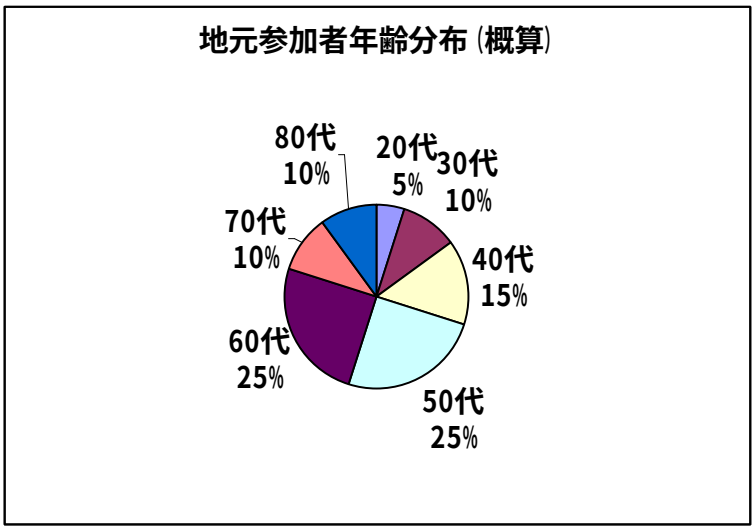


参加者

一般参加者　　８６名（申込　９７件）



地元参加者　　９０名



参加者の声

参加者へアンケートを行ないました。

1、全体を通しての感想をお聞かせ下さい。

内容：・非常によかった ・よかった ・あまりよくなかった ・よくなかった

会場：・非常によかった ・よかった ・あまりよくなかった ・よくなかった

・次回以降も参加したい ・参加したくない

2、 民泊はどうでしたか？

3、 参加費について

・高い ・安い ・ちょうどよい

4、 その他、ご自由に感想や提案をどうぞ

回答は参加者 86 名のうち 57 名からいただきました。

アンケートの結果は以下の通りです。

1．全体を通しての感想	内容	会場
回答数	57	54
非常によかった	38	40
よかった	19	14
あまりよくなかった・よくなかった	0	0
次回以降も	参加したい	したくない
回答数　35	35	0

2．民泊はどうでしたか？

・こころよく迎え入れていただき、大変感謝しています。(36 歳 男性)

・宿主のおもてなしは、すべての点で満足するものであった。(51 歳 男性)

・とってもとってもあたたかいおもてなしをしていただきました。早起きでなかった私が悪かったのですが、朝のイベントがあると泊まり先の方と交流する時間が無いので、交流時間をもう少し作っていただいたらうれしかったです。(28 歳 女性)

・お世話になりました。ありがとうございます。(59 歳 男性)

・普段聞けない地元の人の話が聞けて非常に考えさせられた。(38 歳 男性)

・旅館に泊まっても味わえない味がありました。(32 歳 男性)

・夜遅くにもかかわらず、温かく迎えていただき感謝にたえません。ご高齢の夫婦に遅くまでお付き合いいただくのは気が引けたので、もう少し早い時間に到着できればと感じました。(41 歳 男性)

・民泊先を公募されたとあり、受入先のお持て成しの気持ちを強く感じた。(44 歳 男性)

・他にない体験ですごくよかった。じっくり話せてよかった。(42 歳 男性)

・皆様温かく親切でした。ご飯もお水も都会とは違い新鮮でした。(28 歳 女性)

・電力などのインフラを全て地方に頼る東京のあやうさをお父さんから指摘されて、はっとしました。朝五時から牛の世話、頭が下がりました (29 歳 女性)

・自家製の心のこもった料理、静かな自然の散策や愛情のこもったお土産など最高のおもてなしをしてくれました。感謝！ (43 歳 男性)

・心も身も温まる一時でした。定年後は飯舘に住んでみたくなりました（50 歳　男性）
・夜遅くであったにもかかわらず歓迎していただき感謝しています。たくさんの食べ物が出たにもかかわらず、夕食後であっただけに、ほとんど手をつけられなかったのは残念だった。（45 歳　男性）
・朝食もボリュームたっぷりでした。（52 歳　男性）
・Our host family was very wonderful. We hope to visit them again in May.（38 歳　男性）
・とてもよかったです。行く時間が少し遅かったなと思いました。（28 歳　女性）
・宿泊先、同泊者と夜中までお話をしました。これからの生き方の参考にします。（44 歳　男性）
・夕食、顔合わせをしてから民泊先に移動するまで、ホスト家族が待っている時間が長く、気の毒でした。工夫の余地があるように思いました。（54 歳　男性）
・前日までまったく未知な人間同士とは思えないほどの忘れられない想い出になりました。（女性）
・我が家に帰ったような時間を送ることができました。（62 歳　男性）
・伏流水を飲料水に使っているなどいろいろと発見がありました。（27 歳　男性）
・笑顔で心から待ってくださっていたことを感じ、あたたかい気持ちになりました。までいな食事、までいな心をたくさんいただきました。（58 歳　女性）
・まるで実家に帰った気分でした。（32 歳　女性）
・ゆっくり楽しく休めました。（39 歳　女性）
・地元のかたがたと、直接対話できたのが何よりもよかった。（51 歳　男性）
・民泊時間をもっと長く取っていただきたかった。（31 歳　男性）
・外見は普通でも、中はすごく「和」になっていてびっくりした！（11 歳　女性）
・明るいお父さんといつも笑顔のお母さんに大変お世話になりました。（29 歳　女性）
・とてもすてきなご夫婦で、幸せな時間を過ごさせてもらいました。（57 歳　女性）
・自分の土地との違いを互いに認め合い、そこからの発見が楽しかった。（48 歳　男性）
・炭のコタツや、家の脇でのきのこ狩りなど初めての体験も貴重だった。（41 歳　男性）
・お野菜をいただき、生き方をお話いただき、素敵な経験になりました。（29 歳　女性）
・家の中、風呂トイレ、寝具等、とてもきれいで快適でした。（34 歳　男性）
・本当に価値ありました。また、来ます。（37 歳　男性）

3．参加費について

	高い	安い	ちょうどいい
回答数　51	5	5	41

4．その他

・東京で、どう実生活に活かしているか同窓会をしたらどうか。（28 歳　女性）
・歌垣集を作ってはどうか。（36 歳　男性）
・もう少し参加者に自由に行動させる場があってもいいのではないか。（42 歳　男性）
・参加者間の交流がもっと出来ればよかった。（50 代　女性）
・フィールドワークを増やして欲しい（28 歳　女性）
・プログラムに余裕が欲しい
・トイレがすくなかった。
・スタッフジャンパーを着た人に質問をしてもちゃんとした答が返ってこなかった。スタッフが多すぎたのでは？（44 歳　男性）

◇参加講師･呼びかけ人･達人

参加講師･呼びかけ人

黛 まどか　(俳人)
上野 誠　(万葉学者)
佐川 旭　(建築家)
塩野 米松　(作家)
高橋 世織　(国文学者)
野﨑 洋光　(料理人)
富澤 貞身　(料理人)
藤原 誠太　(養蜂家)
蜂谷 宗苾　(志野流香道家元後嗣)
増田 明美　(スポーツジャーナリスト)
山村 レイコ (エッセイスト･国際ラリースト)

地元達人

赤石沢 弐彦 (大雷神社元総代)
齋藤 政行　(村の暮らし･人足･結)
佐藤 文良　(大工･民芸品作製)
高野 チヨ子 (野菜作り･自給自足実践)
多田 宏　(村の歴史･民俗)
只野 俊　(狩猟･林業家)
永沢 清　(ミニわらじ創作)
花井 正志　(前田炭部会)
菅野 一郎　(前田炭部会)

◇司会進行

佐藤弘子　(いいたて･までいユニット応援団長)

◇協力者

麹谷 宏　(チラシ･ポスター･ウインドブレーカー･名札 デザイン)
高野 靖博　(竹の手作りお箸 製作)
田中 達也　(チラシ･ホームページ コピー作成)
羽賀 清　(竹の手作り器、コップ、会場装飾品 製作)
松吉 太郎　(チラシ･ポスター デザイン)
松永 勉　(当日映像撮影)
南浦 護　(当日写真撮影)
今井 美理ちゃん 小学校 3 年生 (チラシ･ポスター 「までい」の書)

◇民泊協力者

赤石沢清光	赤石澤貞義	赤石澤良一	飯樋善二郎	池田サツキ
小林 文夫	今野 一造	今野 征美	齋藤 源吉	坂本 栄寿
佐野 幸正	佐藤 公善	佐藤 孝雄	佐藤 隆明	佐藤 利夫
佐藤 宣征	佐藤 一	佐藤 文良	佐藤 義明	志賀 清一
庄司 久	三瓶 政美	高野 靖夫	髙橋 忠男	只野 俊
西内 安男	細川 敏夫	細山 利文	松林 正一	目黒 正光
藤井 富男	山田 長清	藤井 富男		

◇飯舘までい料理をご担当いただいた皆様

イータテベイクじゃがいも研究会
飯舘村学校給食センター
飯樋町老人会
上飯樋行政区
氣まぐれ茶屋ちえこ
宿泊体験館きこり
食を考える会
前田･八和木行政区
までい民宿どうげ
山田祥子（株式会社パイク）
森川晃（ホテルメトロポリタン料理人）
宇田川朋美（分けとく山料理人）　　その他の皆様

◇郷土芸能の皆様

赤坂神楽団　　外内手踊り保存会

◇ご協力いただいた皆様

いいたてまでいユニット　箭内　正事、佐藤　四郎、山寺　賢一、増子良一
松野　敦子
飯舘村役場の皆様

◇実行委員

飯舘村実行委員会

実行委員会会長 佐藤　宣征

愛澤　伸一	愛澤　文良	青木　好光	飯樋善二郎	石井　せん
糸長　浩司	大野　裕明	菅野　哲	佐藤　文良	佐藤　弘子
佐藤　峯夫	佐野　ハツノ	只野　俊	中井田　栄	中川　喜昭
細山　利文	松野　光伸	門馬　伸市		

学生実行委員

実行委員長　田中俊
慶應大学　市原寛之、磯崎文那、里見珠衣、杉本しほ、高塚敬子
日本大学　甲斐由紀子
福島大学　五十島宏実、岩淵仁美、児島達哉、斉藤貴広、佐藤和歌子、
鈴木泰裕、坂東佳奈、横山明奈、吉田勝宏、吉田真

◇運営委員

加藤 秀樹 (東京財団会長、構想日本代表、慶應大学教授)
熊野 英介 (アミタ株式会社 代表取締役社長)
渋沢 寿一 (NPO 法人 樹木･環境ネットワーク協会 理事長)
高津 尚志 (株式会社リクルート ワークス研究所 編集長)
牧浦 徳昭 (プロデューサー)
森本 泰久 (株式会社 Qript 取締役 CSO)

◇事務局

飯舘村事務局　菅野典雄、長正増夫、門馬伸市、佐藤周一、藤井一彦
山田敬行、荒真一郎、菅野司郎、庄司奈津子、多田朋永
杉岡誠、石井秀徳、高倉常成、高橋美穂

飯舘村事務局連絡先
〒960-1892
福島県相馬郡飯舘村伊丹沢字伊丹沢 580-1
飯舘村総務課企画係内
Tel: 0244-42-1613
Fax: 0244-42-1601
Mail: saihakken@vill.iitate.fukushima.jp

東京事務局　事務局長 小田早苗
田中伸子、赤川貴大、今井章子、小林悦子
福島伸享、安井美沙子、吉原祥子

東京事務局連絡先
〒107-0052
東京都港区赤坂 1－2－2 日本財団ビル 3 階
東京財団内
Tel: 03-6229-5499
Fax: 03-6229-5505
Mail: saihakken@e-janaika.com